# 突撃！隣の梅花講

―平均年齢八十九・五歳

## 桃源院講

境内の紅葉が色づき始めた十月の秋晴れの日、東北管区長、山形県第二宗務所長のご自坊である桃源院様にお邪魔致しました。

住職様、奥様、ご家族の思いが込められた伽藍を仰ぎながら本堂にお参りさせて頂きました。

本尊様をお参りさせて頂きまして、ふと廊下に目をやると、見事なステンドグラスの蓮の花。

奥様の手作りだとお聞きしました。

観音様の替節の御詠歌が聞こえています。

桃源院境内には、置賜三十三観音第二十三番札所である川井観音がまつられています。

練習中も時折お参りする方がいます。

伊藤良子詠範の指導の元、川井観音の御詠歌の練習です。

十二月四日にお堂で献詠するそうです。

「何年やっても難しいな～。」

始めた頃には大勢いた講員さんも今では四人になってしまいました。四人の年齢の合計が三百五十八歳、平均するとなんと八十九・　五歳です。元気です。

終わって楽しいお茶会です。

―御詠歌を始めたきっかけは

「先の大和尚様がわざわざテープレコーダーを持って勧誘にいらっしゃいました。」

「そこで三宝御和讃をお聞きしていいな～と思って入会しました。」

「始めた頃は夜の練習会でした。」

「午後七時から九時まで。」

「そこから三十分程度お茶のみ。」

**奥様**「う～そだ　うそだ　(,,♪　みんな夜中までお茶飲みでしたよ。」「みんな料理を持ちよってすごくにぎやかでしたよ。」

―先生は、英　登志子先生でしたね、私も大変お世話になりました。

**住職**「母親は学校の先生を途中で辞めたので、再び先生をさせてもらって生き生きしてたよ。」

「先生は綺麗な声だったな～。」

**奥様**「おばあちゃんの人生のほとんどが御詠歌だったね。」

「今の先生も素晴らしいです。大変なご苦労をなさって頭が下がります。」

「習うということは楽しいことです。」

「みんな一生懸命で楽しかった。大会も検定会も着物で行きました。」

—検定会にも

「正装ですからね。」

「御詠歌のお蔭で色々なところに行けました。」「置賜と最上の三十三観音」

「でもここの観音様が一番だな。」

「あら嬉しい。」と、奥様

「全国大会で九州まで行きました。」

「私の主人も一緒に行きました。」

—御主人も一緒に？

「主人も御詠歌が好きで。」

「お寺も大好きで、しょっちゅう。お邪魔してました。」

この御主人様はお寺が大好きで、授戒に参加してその時に頂いた常楽という戒名をとても大事にしていたそうです。

この方は書が得意で、寺の伝道掲示板も住職の代わりに書いて下さったそうで、そこに**常楽**としっかり名前をかくのだそうです。

—御詠歌をしてご苦労もありましたか

「検定は大変でした。」

「検定の時は先生も厳しい。」

「半音上げてと言われてもなかなか上げられない。」

**住職**「母親は文夫先生の弟子なので、師匠と講員さんに恥ずかしい思いはさせられないという責任感があったのだと思う。だから、厳しかった。でもそれが、桃源院講のレベルの高さに繋がったのだと思う。」

—検定会では緊張しましたか

「当日廊下で待っている時は心臓がドキドキで心が張り裂けるようでした。」

「検定室に入ったら心臓がとまりました。」

—心臓がとまった？？

「震えがとまったのですよ。」

「自分でもびっくりでした。」（笑）

—見事合格したそうです

「苦労もありましたが楽しかった。」

「思い出は一杯あります。」

楽しいお話が続いたところで、最後に講員さんに楽しい楽しい替え歌を御披露していただきました。

間違え節だそうです。

「〇〇と●●の聞き違いで～♪△△と▲▲の聞き違いあ～りゃ～これも間違いだよ～」♪

▲間違い節で笑いが止まらす。

**一同大爆笑　笑いが止まりません**

「よく覚えているねー。」

「何回聞いても楽しいね。」

「懐かしくて涙がでそう。」と、奥様

「今まで楽しくて、あっという間だったね。」

皆さまの笑顔に送られて、楽しい楽しい桃源院様を後にしました。

**桃源院講（米沢市）**

講長　英　元弘

指導者　伊藤　良子

令和元年十月二十三日取材